宝物 NEWS ⑨

完璧はない。
が、最高はある——。

ふくしまでがんばるひと・6

創業八拾余年 町田三味線店 ／ 三代目店主 町田敏弘さん

町中に舞え、三味線の声——

とうとうと流れる摺上川。その川べりにぴったり寄り添うように建ちならぶ宿屋と町並みのあちらこちらに敷かれた石畳。ゆらりと現れ、日だまりで毛を繕う猫。そんな飯坂の懐しい温泉情緒を味わいながら、昭和初期から続く町田三味線店を訪ねた。直前までどこか営業に出掛けていたのだろうか、スーツ姿で出迎えてくれたのは三代目の町田敏弘さん。「ホントに私で大丈夫なのかなあ」と苦笑いしつつも、三味線への愛を熱っぽく語っていただいた。

●飯坂温泉の今

「ほとんど連日連夜、お客さんで賑わってましたね」。往事の写真を横目に追懐する三代目。

奥州三名湯に数えられる飯坂温泉は、最盛期の昭和四〇年代後半には一二〇軒の旅館が並び、年間一七八万人の観光客が訪れたが、平成十五年には六四軒の一〇二万人、平成二十一年には約八二万人と、全盛期の半分以下にまで減ってしまったという。

「昔は芸者さんが一六〇人くらいいたんですが今ではもう、四人なんです」。芸者には踊りを受け持つ立方さんと三味線や鳴物の演奏を受け持つ地方さんがおり、共存共栄の関係を保っていた。しかし、観光客の減少とともに花柳界も衰退、「今はもう産業としては成り立っていないんです」。と寂しそうに語る。

取材中、店の前を通りかかった女性に「どうも」。と会釈する三代目。「昔、芸者やってらっしゃった方です」。見ればなるほど、しゃんとした横姿に漂う艶っぽさ。かつての飯坂に少し触れたような気がして、ちょっと得した気分になった。

●色とりどりの音色

「三味線は皮の張り方で音がまったく違うんですよ」。そう言って三代目、ふたつの三味線をおもむろに取り出す。ひとつは皮がきっちりと張られたもの。ひとつは、時間が経って弛んだもの。ビェン、ビェンビェン。ビアン、ビァンビァン。紙面で違いを伝えるのは難しいが、明らかに違う。さらに皮の表面を棒で叩いてみると、きっちりの方は乾いた「カンカン」。弛んだものは湿った「コンコン」。文字通り『張り』のない音を返す。

流れで、津軽三味線の演奏を聴かせて頂く。…こ、これはすごい。さまざまな角度から色とりどりの音色がビシバシぶつかってきて、皮膚の表面が共鳴するような、『体全体で聴いてる』感覚。「ほら、映画も家で見るのと映画館で見るのと全然違うでしょ?」。それと同じことだと三代目。確かにテレビの貧弱なスピーカーじゃ、この迫力を味わうのは無理だろう。

「ちなみに芸者さんが弾くのはまた違うんですよ」。ちんとんしゃん、ちりとんてん。撥が弦に触れるたび音符がぽんぽん飛び出してくるような優しい旋律に耳を傾け、しばし、楽しげなお座敷に思いを馳せた。

●全部、勘で弾くんです

三味線には、ギターで言うところのフレットがない。どうやって弾くのかというと「全部、勘なんです」。手元を見ないで演奏するプロもいるそうで、「逆に、見ちゃうと音程が狂っちゃったりもする」。らしい。

「風が吹けば桶屋が儲かる」という諺をご存じだろうか。大つむじで舞った土埃が目に入り盲人が増える。すると盲人は三味線で生計を立てようとし、三味線を作るための猫皮が必要になる。ネコが減ればネズミが増える。するとネズミはかたっぱしから桶を囓るので、桶屋は猫の手も借りたいほどに忙しくなる。

とある出来事がなんの関係もない場所に影響を及ぼす。という意味の諺なのだが、その昔、目の不自由な人が三味線弾きを生業としていたこともあったという。目が見えないことで聴覚や触覚が研ぎ澄まされるのだろう、優れた弾き手が多いと聞く。そのことは、盲目の三味線弾きで知られる高橋竹山が「名人」と呼ばれていたことからも窺い知ることが出来る。

●オラ東京さ行くだ!

「もともと三味線づくりをやるつもりはなかった」。と語る三代目。東京の問屋で二年半くらい三味線製造の修行はしたものの、それは都会へ出るための口実。十八才。「オラ東京さ行くだ!みたいな感じだった」。と三代目は苦笑う。それでもある程度の技術を身につけて飯坂に帰ってきたが仕事は少なく、三味線とは別の道を歩むことになった。時代の流れに逆らって生きること、それはとても難しいことだった。

平成十二年、二代目が他界。半年ほど店を閉めていたが、「やってみようか」。と腹を決めたのは、昔からのお客さんが「直してくれないか」。と訪ねて来てくれたから。「見るに見かねてという感じでした」。

とは言うものの、出足は決して順風満帆ではなかった。「こんなんじゃ駄目だ!」。綺麗できっちりとした仕事を求める先生方から文句の嵐がビシバシ飛んできた。「もう一度勉強し直そう」。と決意した三代目、本当の仕事を見るため職人の元へ足を運び、そこで気づいた。「自分のやり方ではダメだ」。

●三味線は生き物だらけの楽器です

ところで皆さん、三味線が三つに分解できるって知ってましたか?上棹・中棹・下棹と。そのメリットは持ち運びしやすいこと。しかし、最大の理由は反りを少なくするため。だから、接合部分の凸凹は「一ミリでも狂ったらダメなんです」。一見すると継ぎ目がまったく見えないほどの巧緻に深いため息をつく取材陣。

ため息ついでの驚きは「素材が全て外材」。だということ。すべてタイやインドなどから輸入しているらしい。…和楽器なのに、と寂しい気もするが、音を追求した結果、現在の形に落ち着いたのだとか。

ため息ついでの驚きついでで目からウロコが落ちたのは、「三味線は生き物の集合体」。だということ。植物である棹や胴を始め、撥は水牛の角と亀の甲羅を使い、弦を調整する糸巻きは象牙。そして皮は猫。思わず「ありがたやありがたや…」。と手を合わせたい気分になる。

▲皮と木栓

三味線は皮が命

皮張り作業を見せていただいた。「これで仕上りが決まるんです」。作務衣を纏った三代目の表情は『三味線は皮が命』とばかりの職人モード。そして、「これ、犬の皮なんです」。そう言って取り出したのはごわごわした画用紙のようなもの。これが皮？ というか犬の？「津軽三味線は犬の皮を使うんです」。三味線の皮イコール猫という先入観から取材陣一同「へぇー！」。津軽以外は猫の皮を使うこともあるが、諸般の事情により国内では入手困難らしく、犬皮も猫皮もタイから輸入しているのだという。

作業は型取りからはじまる。ポイントは毛穴のある場所を選ぶこと。良い音が出るのだという。次に、胴とのなじみを良くするために皮の表面を削り、濡れ手ぬぐいで柔らかくする。そして、ずんぐりむっくりした木製の洗濯バサミみたいな『木栓（もくせん）』を皮の周囲にくまなく取り付ける。さてさて皮張り作業はここからが本番。ちょっとした躊躇（ためら）いが失敗を招くので、精神統一のための一服が欠かせない。「だからタバコやめられないんです」。

「…さてと」。ひとつの深呼吸で、暗黙の了解の沈黙が作業場を包む。

もち米の糊を塗った胴に皮を貼り付けると、「六〇才を過ぎたら張れなくなる」ほどの力作業に突入する。胴を足で押さえつけ、木栓に巻き付けた紐を締め付けてゆく。力技とはいえ加減を誤れば破裂する。少しずつ少しずつ、表面張力に水滴をポツ、ポツと垂らすようなスリルさで、バースト寸前限界ギリギリまで締め付ける。見ているだけでもみるみる神経がすり減るようだ。

「十回に一回くらいはパーン！とぶっつぁけちゃうんです」。皮張り作業を終えた安堵の笑顔に、我々取材陣も肩の鎧を降ろす。三代目は断言する。「これは完璧！という製品はまだありません」。店を継いで十年。いよいよ五〇の大台に乗ってもなお、試練の階段を登り続けている。

十回の練習より一回の人前

職人であり、キャリア七年の弾き手でもある三代目。弾いて音の違いをチェックし、皮張り作業にフィードバックさせるのももちろんだが、弾き手として三味線をたくさんの人に伝えてゆくことが最大の目的。

現在、職人の傍ら、県内数カ所の教室で三味線を教えている。生徒さんには退職された団塊の世代の方が多いが、全体で見ると女性が七割を占めるというから意外だ。また、おじいちゃんがやっているのを見てお孫さんが始めるというパターンも増えてきたという。そして、その生徒さんたちと老人ホームを訪ね演奏する。少々未熟でもとにかく人前で弾かせるのは、一所懸命やらなきゃ！の『上達スイッチ』が入るからだという。「十回の練習より一回の人前なんです」。

そのほか、まちなか広場のイベントにも多数出演するが、県外に遠征することもある。福島市と荒川区の交流イベントで飯坂太鼓とともに演奏したり、石垣島との交流イベントでは息子さんと親子共演。沖縄の三線とのコラボレーションで『涙（なだ）そうそう』を演奏したり、渋谷の東京電力では飯坂の足湯とともに三味線で来客者を癒したりもした。

プロの演奏は鳥肌が立つんです。

居酒屋オヤジが三味線を弾く日

「プロの演奏を聴くと一〇〇人が一〇〇人『何だこれ!?』って感動しますよ」。とにかく一度、『生』で聴いてほしいと力説する三代目。居酒屋で友人相手に弾いたところ、見知らぬ客からおひねりをもらったというエピソードは、三味線に人を惹きつけるチカラがあるという証拠だろう。

いずれは「居酒屋のオヤジでも誰でも弾けるようになればいいな」。それが三代目の理想。そして現在、三味線の演奏をサービスとして提供してはどうかと、旅館の旦那や女将を説得中。確かに、町全体に華やかな音符がちらほら舞えば、それだけできっと雰囲気は変わるだろう。「若い人たちが動けば盛り上がると思うんです」。楽しげな企みを話す三代目の瞳の奥に、虹を見つけた。

創業八拾余年 町田三味線店

〒960-0201 福島市飯坂町字湯沢14
電話・FAX024-542-3740
http://www.machida-shamisen.com

タカラモノニュースは、お客様の「楽しい、ウレシイ」に役立つ情報提供を目指して、年4回発行しております。ご意見ご要望など、なんでもお気軽にお寄せください。
2011年2月発行

発想から発送までお客様のニーズにお応えします。
emadaira タカラ印刷株式会社
〒960-8141 福島県福島市渡利字絵馬平86-9
TEL.024-526-4303 FAX.024-526-4302
E-mail takara@inaka.co.jp http://www.takara.inaka.co.jp/

RB-Q04008 CM044
適用範囲：印刷・製本・社会調査